

## 公一〇

### SFTS ウイルス感染ネコの周辺環境におけるマダニ相とウイルス叢 (第2報)

○木村俊也<sup>1)</sup>、小林大介<sup>2)</sup>、伊澤晴彦<sup>2)</sup>、木村志恵、鍬田龍星<sup>3)</sup>、南 博文<sup>4)</sup>、  
前川芳秀<sup>2)</sup>、比嘉由紀子<sup>2)</sup>、林 利彦<sup>2)</sup>、葛西真治<sup>2)</sup>、澤邊京子<sup>2)</sup>

<sup>1)</sup>愛媛県食肉衛生検査センター、<sup>2)</sup>国立感染症研究所・昆虫医科学部、

<sup>3)</sup>岡山理科大学・獣医学部、<sup>4)</sup>南動物病院・愛媛県

**【はじめに】**2019年5月に愛媛県内で飼いネコの重症熱性血小板減少症候群(以下、SFTS)発症例が確認され、遡り調査で発症ネコの隣家で飼育されているネコも1年前にSFTSウイルスに感染していたことを抗体検査で確認した。更に2018年9月に隣地区でSFTS患者が発生していたとの情報を得たことから、2019年6月にこれらSFTSウイルス感染ネコの周辺環境で植生マダニを捕集しウイルス解析を行ったところ、タカサゴキララマダニのプール検体から発症ネコ及び隣地区の患者から検出されたウイルスと同じ遺伝子型のSFTSウイルスが検出された。検出されたSFTSウイルスはこれまで本県で確認されたことのない韓国株(2016年に韓国の患者から検出)であった。そこで、マダニ相とウイルス叢の継続調査を行ったのでその概要を報告する。

**【材料及び方法】**2019年7月から2020年6月の間、月1回程度、フランネル法(旗振り法)で捕集した植生マダニについて種の同定及び保有ウイルスの解析を行った。ウイルス解析は種・発育段階ごとにプール検体とし、培地中で破碎後にフィルターろ過を行い、RT-PCR、サンガーシークエンス及び次世代シークエンスにより行った。

**【結果】**捕集した植生マダニ(幼ダニを除く)は3属6種3,078頭で、多い順にタカサゴチマダニ1,553頭(50.5%)、キチマダニ990頭(32.2%)、ヤマアラシチマダニ429頭(13.9%)、タカサゴキララマダニ53頭(1.7%)、アカコッコマダニ47頭(1.5%)、フタトゲチマダニ6頭(0.2%)であった。タカサゴチマダニとキチマダニが優占し、本県の他の地域と比較しフタトゲチマダニは極端に少ない地域であること及び種ごとの季節的消長が明らかになった。ウイルス解析の結果、これまでにSFTSウイルス以外に複数のウイルスが検出された。

**【考察】**調査地点は閉鎖的地域であるが、ため池があり渡り鳥を確認したことから、渡り鳥によってウイルス保有のマダニが運ばれてきた可能性が考えられる。北海道においては新規 *Orthonairovirus*(*Yezo virus*)によるマダニ媒介性急性発熱性疾患の患者が報告されている。今回検出された新規ウイルスの近縁ウイルスもヒトへの病原性が知られていることから、ヒトやその他の動物への感染性や病原性さらには新たなマダニ媒介ウイルス感染症としての潜在的なリスクを判断するため、さらなる調査を進めることとしている。